文化

日本社会の優生思想 表出

相模原殺傷16日判決 作家・詩人 辺見庸さんに聞く

辺見庸さん

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。（上野敦＝共同）

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

被告と同じ論理

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

底知れない悪意

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

■小説「月」

寓意（ぐうい）に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありきたりの〈善意〉」から発する「おさだまりの文言〈オキノドクニ…〉」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。

「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは、だれよりもそっちょく」な職員「さとくん」に心を許している。だがさとくんはある日「〈敵対者〉の空気」をまとってやって来る。

知られざる南極物語刊行

「その犬の名を誰も知らない」

日本の南極観測の越冬隊を支えた樺太犬。1958年、悪天候で南極に置き去りにされた1年後、タロとジロの2匹が越冬隊と「再会」する逸話は映画「南極物語」などで知られる。だが68年、その再会の現場近くで1匹の樺太犬の亡きがらが見つかった事実は一般には知られていない。

この「第三の犬」は、行方不明とされた6匹のいずれかなのか。なぜ昭和基地近くにとどまって死んだのか。そもそもなぜ亡きがら発見の事実が知られていないのか…。

著書「その犬の名を誰も知らない」（写真・小学館集英社プロダクション）は、それらの謎に迫るノンフィクションだ。2018年に亡きがら発見の事実を発掘した元西日本新聞記者の嘉悦洋さん（68）が、第1、3次越冬隊員で犬係を務めた北村泰一・九州大名誉教授（88）を中心に取材した。記憶を手繰るうち、未熟な若犬のタロとジロがなぜ極地で生き延びられたかという別の謎にも一つの仮説を得る。

越冬隊と南極に向かった19匹の樺太犬との出合いから別れまでも詳述する。一筋縄ではいかない個性豊かな犬たちの姿は、かえって人間との強い絆を感じさせる。著者は「第三の犬をはじめ、名もなき犬たち全てが南極で人間と頑張ったことを広く知ってほしい」と語る。1650円。

（城戸良彰）

緑地帯

地図よもやま話①

星埜 由尚

私は、戦後すぐの生まれである。既に古希を過ぎた。思い返すと、物心ついてこの方、地理や地図のことが私の日常から消えることはなかった。小学生から中学生の頃は、学校が終わって家に帰ると、友達と遊ぶとき以外は、地図を描いていたような気がする。日本地図をいろいろ工夫して自分流に描き、都市や山脈、湖などを記入する。都市の人口などを覚えるのが得意で、世界の首都を暗記して、友達と競争したものである。

中学生になると、天気概況のラジオ放送を聞いて天気図を作っていた。当時の気象台まで出掛けて天気図の用紙を買ったのを覚えている。5万分の1地形図を買い集めるようになったのもその頃である。地図を買って国土地理院（当時は地理調査所）を知った。時刻表も好きで、将来は国鉄に入りたいと思っていた。国鉄に入るなら大学は法学部に入らないとだめだと祖父母から言われ、法律は勉強したくないと思い諦めたが、国土地理院で測量法の改正などにも携わり、法律とにらめっこすることもあったのは皮肉なものである。

中学校では、社会科研究部に入って、よい先生に巡り会い、東京の多摩川を上流から下流まで巡検に連れていかれ、野外学習に励んだことを思い出す。この頃から、将来は地理学を勉強してその方面の仕事をしたいと思うようになった。結局、地理・地図という地味な世界で飯を食った私だが、思い入れのある地理や地図の話をさせていただきたい。

（ほしの・よしひさ 東京地学協会副会長＝茨城県）